

佐久間寛著

『ガーロコイレ——ニジェール西部農村社会 をめぐるモラルと叛乱の民族誌』

平凡社、2013年、6,048円＋税、446頁

杉村和彦

ニジェール川流域の一農村の19世紀末から21世紀初頭にいたる歴史民族誌として、ニジェール西部の農村社会の土地をめぐる村落の分裂をきわめて詳細に描き出した力作である。1990年代中頃、ニジェール共和国西部の一行政村が分裂し、新村が創設された。その約10年後に同村をおとずれた著者は、その出来事の経緯を調査終了の間際になってはじめて知らされ、その事実の意味を渾身の力を振り絞って、自らの立ち位置をも俎上に挙げながら追究する。語られざる住民の思いに向き合い、その意味を尋ね、西田哲学が提起したような「歴史的身体」という視角、いわば歴史の重みが身体化され感情がないまぜになった住民の中からモラルを引き出し、その視点から土地所有をめぐる村の分裂、「叛乱」に至る一農村の歴史を再構成している。

269

その追究の過程は、さながら探偵小説を読むような面白さがあり、行政村の分裂という一つの「事象」を通して、植民地主義や近代化というマクロな視点にも留意しつつ、一貫して内部からその意味をとらえなおすぐれた視点を有している。また本書は「開発」にかかわる長期的視点を持った歴史人類学的研究ということもでき、そうした視点からも十分に評価できる作品であるといえるだろう。こうした点から2014年の日本アフリカ学会研究奨励賞と発展途上国研究奨励賞を受賞しており、学界からの高い評価がすでに示されている。

まず本書の概要を以下、簡単に要約しておこう。

第1部 言説

第1章 種族

第2章 首長国

第3章 協同組合

第2部 親族

第4章 「出自」原理

第5章 実相

第6章	「先着」原理
第3部	首長
第7章	植民地期
第8章	軍政期
第9章	連続と断絶
第4部	土地
第10章	灌漑農地外の状況
第11章	灌漑農地外の制度
第12章	灌漑農地内の制度
第5部	叛乱
第13章	経緯
第14章	結末
第15章	事後

第1部「言説」では、伝統首長と協同組合という二つの制度をめぐる先行文献研究がなされている。本書の主題は、村の静態的構造の分析ではなく、村の分裂という動態的過程の検討である。その先行研究の中で、この本の主題となる村の分裂の中心的なアクターを内包する上記の二つの制度の歴史的展開が、18～19世紀の外来遊牧民の流入、19～20世紀のフランスによる植民地化、国有灌漑農地の建設という1970～90年代の農村開発との連関でまとめられている。村のミクロな現象をマクロな歴史動態の中に位置づけつつ、国家規模の政治的・経済的変動との間で連鎖的に生じた社会と個人の分裂の過程としてとらえる視座の重要性を指摘している。

第1章の「種族」では、国家・社会関係をめぐるこれまでの先行研究の動向がアフリカの研究視点との関係で位置づけられている。特に本書の研究対象であるニジェールの伝統首長制との連関で先行研究が詳細に精査されている。またその検討は植民地初期の「地域の首長たち」の創設と再編を踏まえつつ、「種族と首長」との関係に焦点を当てる。第2章の「首長国」では、第二次世界大戦後から1980年代にかけて、「首長国」なる「伝統的」な政治組織が生み出されていく過程を明らかにしている。第3章「協同組合」では、本研究の対象地ガーロコイレにおいて稲作用の灌漑国有地の管理・統括の主体となった「灌漑農地整備公社（ONAHA）」に焦点が当てられる。植民地時代に設置された「ニジェール信用協力連合（UNCC）」系協同組合との社会的性格の異同がこれまでの研究史を参照しつつ考察されている。灌漑農地の整備された地域では、ラッカセイからコメへの流通商品の変化が生まれ、ガーロコイレなどでは「協同組合」の主体の交代も進行したことが述べられている。

第2部「親族」では、第1部の研究の方法的視角を踏まえ、著者のフィールドデータを基にして、ソンガイ語の社会的・自然的分類を表す「ドウミ *dumi*」という語を軸として調査地の親族の構成を詳細に検討している。

第4章「「出自」原理」では、まずドウミを祖先中心的な親族としてとらえ、隣接概念

との比較からドウミの構成原理を検討している。「ウィンディ *windi*」が養子や寄食者などを含む居住集団を示すのに対してドウミはそういうものを含まない親族集団である。またドウミは、「奴隷は祖先をもたない」という理念を含んだ、非「生物学的」範疇でもあり、本書ではドウミを「腹 *gunde*」という喩に支えられている点に注目し、その社会結合の規範を「腹」としてとらえている。第5章「実相」では中心的なフィールドであるガーロコイレ村のドウミの実相の記述がされている。その具体的実相の中では理念と現実の齟齬が浮き彫りにされ、ガーロコイレには4、5の主要親族としてのドウミが存在している。しかし興味深いのは村の中での具体的な主要親族の名は「祖先をひとつ」にする人びとというよりその一族に対応関係にある特定の集落を指示することが多く、ここではドウミは地縁的同一性に基づく表象として位置づけられていることが示されている。第6章「「先着」原理」では、ドウミの構成にかかわるガーロコイレの主要親族集団の正当化の在り方を支えるもう一つの規範を「先着」「後着」という視点から検討している。ガーロコイレの事例からとらえられる後着者はもともと村人に歓待される客人であるが、定住して客が増大すると先着者の脅威になることにより、後着者の劣位が強調されることになるという。このような先着者と後着者の関係を著者は、この後着者が「その祖先は足だけできた」と言うことに着目し、「足の原理」と名付け先着者の優越性を明示化している。

第3部「首長」では、中心的なフィールドであるガーロコイレをめぐる、植民地の中で構築された伝統首長の権威構造が社会の側によっていかに正当化されているかという点を、フランス植民地期とセイニ・クンチェ軍政期（1974～87年）の首長位創設譚の検討をつうじて考察している。

第7章「植民地期」では、植民地期一つの行政単位であるカントン長に関する創設譚を取り上げている。その中で行政村命名と首長任命をめぐるフランス植民地期の文献と口頭伝承の考察を行うとともに紙として語られるフランスの任命状が持った恣意的な行政村の任命の暴力の在り方を劃出している。そしてここではその暴力の中を生きる人達が自らの首長創出を内部から彼らの伝統規範である、祖先中心的な親族に支えられた社会結合の規範としての「腹の原理」を介して意味づけていることを明らかにしている。第8章では1974～87年までのクンチェ軍政期の出来事に焦点を当てて、首長位（村長位）の創設譚を検討している。ニジェール川西岸の集落の行政村サーバ・テラはガーロコイレ村から分裂するかたちで新設されたが、本章ではその経緯の背景にあった1980年代の強制移住騒動に着目し、その出来事にかかわる村人の証言を丹念に取り出している。興味深いのは、その証言の分析において、語られたこと以上に語られなかったことがらの意味を問い詰め、出来事からそれにかかわる言説を再構成するときの規範的原理に着目していく視点である。第9章「連続と断絶」では、植民地の時期とクンチェ政権期に通底する人々の言説空間の中にある理念的首長像の在り方が検討されている。このような権威を支えるものとして人々は「先着者」「後着者」の論理に言及し、著者のいう「足の原理」がすでに現代史ともいえる村の世界にも生きていることを述べている。このような「足の原理」は村長の地位を支えるものである。カントン長の権威は村長の地位を駆逐する州・県・国家とつながるものであり、村長とカントン長の間に「足の原理」を介した分節化がみられるこ

とを指摘している。

第4部「土地」では、村の中の先着者の後着者に対する優越的な財の中心を占める「土地」に焦点を当てその具体的な様態を分析している。

第10章「灌漑農地外の状況」では、先行研究で指摘されてきたような先着者と土地所有者、後着者や奴隷を土地用益権者とするような土地所有の構造がニジェール川島嶼部ではすでに成り立ちがなくなっていることが指摘されている。特に1960年代に島嶼住民が西岸の地で耕作するようになって以降は、土地の所有状況においては先着者と後着者の所有が逆転するような状況が生まれていることが指摘されている。第11章の「灌漑農地外の制度」では、土地の所有と用益の主体の変容の過程と土地をめぐる言語実践をめぐって検討している。興味深い論点として「土地を与える」という言葉の多義的な意味に焦点を当て、貸借の意味をあえて固定せずにあいまいなかたちでおくというような次元からその曖昧さの中で生じる人間関係の在り方を照射していることである。言説的な曖昧さの中で常に土地の「受け取り」を意識する中で生じる歴史的に身体化された行動の規範（モラル）があぶりだされている。第12章では灌漑農地外の土地との比較で1990年代に建設された国有の灌漑農地における土地制度の特質を検討している。灌漑農地では「水の監督者」に大きな権利が与えられ、土地を「受けと」り、「与え」る権限を有する協同組合の代表が特別の地位を有する。このような権限の集中は灌漑農地外と灌漑農地において異なるものの、土地を「受けとる者」「受けとられる者」の葛藤が存在する状況が通底することを明らかにしている。

最終部「叛乱」では1995年の代表解任騒動という一回性の出来事に着目し主題化している。その分析の中で、灌漑農地の再分配を不当と主張する組合員（反代表派）による、再分配のやりなおしと代表の辞任を求めて引き起こされたこの騒動に関して、研究者をも含みこんだ言語空間の中での出来事の語られ方への詳細な考察を通し、その社会的事実が明らかにされている。

第13章では、この騒動の経緯とこの地域社会の中での騒動の歴史的意味が検討されている。この騒動は、灌漑農地における土地が当時のガーロコイレの首長の身内によって独占された協同組合の代表によって取り上げられることによって、他の者が灌漑農地から排除されるという状況に対する反発に端を発するものであった。そうした中で反代表者たちが土地を耕起して居座るという抵抗によってこれまでの村の慣習的秩序を打ち破り、「受けとる」者と「受けとられる」者の関係を反転させた状況は、村人によって「クーデター」とみなされたことが示されている。第14章では騒動の鎮静化のプロセスが検討されている。結果的に騒動は、外部からの「司令官」による調停によっておさまられた。しかし調停後の顛末として、ガーロコイレの首長がこれまでの協同組合の代表を支えてきたと考える反代表のグループは村を割り、新村の創設に向けて進んだ。一方で反代表派が灌漑農地から離れる中で、それまでそのグループをまとめていた灌漑地内での利害という結束の基盤を失って分裂していったことが示されている。終章では著者の調査過程そのものをひとつの資料として、騒動をめぐる語りの語られ方、調査者への情報の秘匿の在り方など情報開示をつうじた情報秘匿の言語実践とでも表すべき現象を検討している。調査過程

の再検討をつうじた本書全体の総合がなされ、外来の研究者を巻き込むかたちで生成していた、灌漑農地内外の土地制度を貫く葛藤の構図が示されている。

本書は、ニジェール川流域の「ガーロコイレ」という名前の一行政村の分裂をめぐって、徹底的な分析を行ったすぐれた著作である。植民地時代の資料から関連論文・著作にいたる資料の精査と批判的な解説、長期のフィールドワークの経験、自らを含めた多種多様な声を混淆させる実験的な記述など随所に卓越する力量を感じさせる。とりわけ本書の副題である「モラルと叛乱の民族誌」を支えるものとしての情動、自己の重層性といった民族誌記述、叛乱をめぐる言説に関して「語られざる人」の声に耳を傾け、土地所有をめぐる住民のモラルに着目した言説分析は説得的で興味深い。

この社会の土地制度を下支えしているのが、「神聖にして不可侵」な権利概念などではなく、他者に負うことなくして土地は得られないというモラルであるという著者の視角は、市民社会・市場社会内に非分割な所有主体を見出してきた西欧的な所有概念への痛烈な反撃の射程が内在化されている。また事象の細部においても、相手の言葉を自分のものとするために自問自答を繰り返す記述の方法は、現場のリアリティを伝える上でのユニークな方法となっている。

また著者は「叛乱」を醸成する、感情をないまぜにしたフィールドの「モラル」をとらえるにあたって「モラルは、「道徳」という訳語とともに、善悪の価値や行動の基準の意味表現での人類学でも古くから用いられてきた概念である。しかし、時にこの語が「精神」と訳されることが示唆するように、それは、個の身体のうちにある心的領域と同時に、個人の心理をこえてひろがる連帯の精神を意味する概念でもある」と指摘し、そのとらえ直しを提唱している。興味深い論点であるが、評者にとってこのような歴史を揺るがす社会的想像力としての「モラル」の位置づけ以上に興味深い記述と分析は、「モラル」の語られ方にまで降り立ち、これまで看過されてきた、言葉にならない言葉、ある状況の中で語られざる「モラル」の位相をすくい出そうとしている点にある。

著者が焦点に据えた「モラル」の分析の場は、「明示的な係争と暗黙」が情動の回路を通して連続しているところにあるという。語られる世界もモラルが明示化される重要な表現の場であるが、そこを下支えする濃密な語られざる言葉の世界は、深層のモラルとしてそれ以上に人を動かすものかもしれない。「明示的な係争と暗黙」の中で著者は眩きともいえる言葉に注視する。その渦中にいたたった一人の、実詞としては意味をなさない「ごく」のくりかえし、「(中略)フリアンデのなかに、わたしはほんの、ごく、ごく、ごく、ごく、ごく、ごく、ごく、ごくわずかな土地さえもたない。(中略)」という発話の中に、叛乱の深層にある「圧倒的な欠如、埋めようのない欠如」の感覚を探り当てる。「恐れ」「身構える」という場の中で発せられた言葉の中に叛乱のモラルを見出す試みは、叛乱とモラルを結ぶ民族誌の一つの到達点であり、新しい研究の境域を描き出しているように思う。

ただ本書全体の構成からみると、上記の著書のメインテーマとなった土地をめぐる村の分裂とその背景にあった「叛乱とそれを下支えたモラル」の追究への焦点化は、民族誌記述を旨とする氏の調査の最終段階ではじめて浮かび上がってきたものであるということもあり、いくつかの問題点も残したように思う。

中心的に設定されたフィールドの事象との連関で評者が議論のより踏み込んだ論点の必要性を感じたのは、灌漑農地の創設ということの中でも、本書で取り上げている「灌漑化」を担う社会組織・国家による管理という特質だけでなく、灌漑化された「農地」の有する社会経済的意味も精査する必要があったのではないかという点である。「灌漑」化はこれまでも多くの論者が指摘してきたように、天水農業世界の間では大きく社会経済的意味を変える。本書の土地の所有という文脈の中では、所有される「土地」の質や価値、その意味が大きく変容する。本書では、農地の水田灌漑化による変容の考察を国家の管理による土地の所有関係に限定してとらえているが、それだけで水田灌漑化による住民の土地をめぐる所有意識の天水農地との間での「連続と断絶」を十全に明らかにすることができたかどうか。

天水を前提としたアフリカの農地の中に、突如として土地の資源価値の極めて高い水田灌漑というアジア的世界が生み出されているのだとしたら、研究対象とされたフィールドの有する地域的な特異性をより広い文脈の中でとらえ直してみる必要もあろう。アフリカ農村の土地所有・土地保有のユニークネスに関する議論は、これまでも多くの研究者によって広範に展開されてきている。本書で取り上げた事象との関係が地域比較の視点からより詳細に考察されていれば、本書の研究のスケールと射程はより広がりをもつものとなったと思われる。

もう一点は本書における導入部分で縦横に記された「国家と社会の葛藤」の基層にあるアフリカ国家をめぐる問題とその視角に関して研究事例を通して再検討する、というものにはなっておらず、未消化な部分を作っている。また結論部分で焦点化された「叛乱とモラル」に関しても、研究書として、冒頭で関連文献の取りまとめがなされていたら、本書の取り上げた事例とその分析の厚みの意味をより平明に読者に語りかけるものになっていたように思う。

このように本書は一つの本としては未完の書としての性格を持っている。しかしその未完の部分は、フィールドの中で係争とその語りの中に自らも一人のアクターとして巻き込まれ、そのリアリティと意味に迫ろうとする中でやむを得ず書き進めた、若い著者の熱い魂が生み出した結果でもある。著者の荒ぶる魂は、論文構成の精緻さにかかわらずよりも、フィールドの言葉の奥の奥に突き進んでいく。本書はそれゆえにこそ読ませる力を持った珠玉の作品になっているともいえるだろう。この本はこれから今日的なアフリカの土地問題にかかわる研究者や実務者が手にする必読の書になるだけでなく、歴史人類学の方法やフィールドワーク論も含めて、アフリカ研究を超えた、人類学的研究を志向する多くの人に手にとってほしい本である。著者が叛乱の一事象を紡ぎだす村人の声の再構成の中で、渾身の力で風穴を開けようとした方法的視角は、学際的分野で深化すべき多くの可能性を含んでいる。同時に著者自身にも、そのこじ開けた風穴の視界の意味を、自らの内部から沸き立つ声を大切に、さらに解き明かしていつていただきたい。